



公園・街路樹等病害虫・雑草 管理マニュアル 優良事例集

Vol.2



平成29年3月

環境省 水・大気環境局
土壌環境課 農薬環境管理室





CONTENTS

はじめに 1

総合的な取り組みの事例	樹木医やボランティアと連携した 史跡の松並木保全のための多角的な取り組み 2
	園芸ボランティアを養成し、 早期発見・物理的防除のサポート体制を構築 4
	農薬の適切な取り扱いに重点を置いた多角的な取り組み 6
	パトロールによる定期巡回や市民の通報による 早期発見・初期防除の取り組み 8
	公園マニュアルを参考とした市独自の ガイドラインに基づく防除の実施 9

公園マニュアル周知・活用 の事例	公園マニュアルを参考とした独自のガイドラインを策定し、活用 10
	さまざまな会議や研修会での活用 12

公園マニュアルに基づいた 適切な防除の事例	発生予測による早期発見と物理的防除（捕殺・剪定） 14	
	早期発見・物理的防除(捕殺・剪定) 自治体との病虫害発生情報の共有 15	
	物理的防除（害虫発生源樹木の撤去） 16	
	物理的防除（剪定） 17	
	物理的防除（こまめな除草・剪定・捕殺等） 18	
	物理的防除（剪定） 19	
	物理的防除（粘着シート被覆・捕殺） 20	
	農薬飛散に配慮した適切な防除 フェロモン剤の活用 22	
	いろいろな手法を組み合わせた適切な防除 物理的防除・農薬飛散防止 病虫害抵抗樹種の移植等の総合的な対応 26	
	いろいろな手法を組み合わせた適切な防除 物理的防除（捕殺・防草シート）と農薬のスポット散布 28	
	いろいろな手法を組み合わせた適切な防除 物理的防除と農薬飛散防止 30	
	管理者と防除実施者の適切な連携体制の整備 31	

まとめ 32





はじめに

農薬は、適正に使用されない場合、生活環境に悪影響を及ぼすおそれがあります。特に、学校、保育所、病院、公園等の公共施設内の植栽、街路樹において農薬を使用するときは、農薬の飛散を原因とする住民、子ども等の利用者に健康被害が生じないように、飛散防止対策の一層の徹底を図ることが必要です。

このため、環境省と農林水産省では「住宅地等における農薬使用について」（平成19年1月、農林水産省消費・安全局長及び環境省水・大気環境局長連名通知、以下「住宅地通知」という。）を発出し、また、環境省では公園・街路樹等における病害虫の管理に関する基本的な事項や考え方を整理した「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（平成22年5月、以下「公園マニュアル」という。）を作成してきたところです。しかしながら、その後も現場においては周辺住民に事前のお知らせをしないままに公園等で農薬が散布された事例、街路樹等に対し害虫の発生状況にかかわらず一定の時期に決まった農薬が散布されている事例等があり、また、多くの自治体や施設管理者においては実際の公園や街路樹等での植栽管理に苦慮している一方で、自治体や施設管理者が、公園マニュアルを活用して農薬使用者に研修を行っている事例や公園マニュアルの考え方に沿った公園や街路樹等の植栽管理を行っている事例等があることから、これらの事例を収集し、平成25年3月に優良事例集として作成しました。

その後、平成25年4月に新たな住宅地通知を発出し、26年1月に公園マニュアルの改訂を行ってきましたが、優良事例集については作成から4年が経過する時期となり、現場での取り組みの工夫も重ねられてきているため、これらの事例を「優良事例集 Vol.2」として再度取りまとめることとしました。本事例集が、より良い公園や街路樹等の植栽管理に取り組むための参考資料となれば幸いです。

最後に、事例収集に当たり、ご協力を賜りました事業者、県、市町村の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

平成29年3月

環境省水・大気環境局土壌環境課農薬環境管理室



農薬飛散に配慮した適切な防除 樹幹注入剤の利用

自治体・業者名 栃木県栃木市（防除委託者：第一アグリ株式会社）

取り組みの概要

【防除対象場所】 丸沼・長瀬公園 ・面積 0.8ha

◎アメリカシロヒトリの防除

- ・当初は、動力噴霧器にて殺虫剤を散布していたが、平成28年度に、特に住宅地に近い公園のサクラ21本について、農薬飛散のない樹幹注入剤の使用を検討した。
- ・導入前に担当者立会のもとデモ施工を行い、その手順や防除効果の確認・承諾が得られたことにより、樹幹注入法を採用した。
- ・従来、年間2回の農薬散布を行っていたが、現在は年1回の樹幹注入ですんでいる。



樹幹注入剤の注入作業

取り組みによる効果

- ・農薬散布に比べて、天候による影響を受けることが少ない。
- ・周辺への農薬飛散がなく、周辺環境への影響が少ない。
- ・サクラは例年、毛虫発生が問題となっているが、いったん発生した毛虫が樹幹注入された樹の葉を摂取すると死ぬため、被害は抑えられている。

今後の課題

- ・毎年実施する場合、注入剤を入れる穴の復元状況について、倒木の原因にならないよう、よく事前調査をする必要がある。